

〔自由論題 E〕 歴史

〈午後1〉 24 番

座長：吉澤誠一郎（東京大学）

E-1：小野泰教（東京大学）：郭嵩燾の風俗観念と西洋政治制度——議会制、学会組織を中心に——

郭嵩燾（1818-91）は、道光から光緒期にかけ、幕友、地方官、郷紳、そして初代駐英公使を歴任した、中国近代史上 特筆すべき士大夫の 1 人である。本報告では、この郭嵩燾が 1877 年から 79 年にかけてヨーロッパ諸国の議会制や学会組織に対して示した認識を中心に、士大夫が何を基準として西洋政治制度を評価したのかを考察する。

『郭嵩燾日記』等の史料からうかがえるのは、郭が、議会や議員の在り方、そしてイギリスの王立協会（Royal Society）をはじめとする学会組織に並々ならぬ関心をいだき、自らも足を運んでいた事実である。郭嵩燾がこれら西洋政治制度を高く評価したのは、それらが風俗の改良に役立っていると考えたからであった。

郭嵩燾の風俗重視については、すでに多くの先行研究が取りあげているが、総じて、郭の士大夫としての前近代性、限界性の 表れという文脈で論じられることが多かった。一方、報告者が関心を持つのは、郭の風俗観念の内実はいかなるものだったのか、またなぜ風俗改良の方法として 議会制と学会組織が注目されたのか、ということである。本報告では、風俗という観念から捉えられたユニークな西洋政治制度像を描き出したい。

さらに、こうした風俗改良をめぐる士大夫たちのなかでもさまざまな主張があり、彼らの西洋政治制度に対する着眼点も異なっていた。本報告では、郭とともにイギリスに渡り、駐英副使、駐独公使を歴任した劉錫鴻などの比較対象をおりまぜながら、当時の士大夫たちの共通課題 であった風俗改良をめぐる議論の多様性を浮き彫りにしたい。

E-2：黒川由希（名古屋大学・院）：王韜『淞濱瑣話』『漫游随録図記』から見る清末文人の女性像・女性観

清末、洋務運動期の思想家として知られる王韜（1828～1897）は、政治・経済などに関する多くの著作がある一方、『瀛壖雜誌』『瓮牖余談』『漫游随録図記』『扶桑游記』『遯窟譚言』『淞隱漫録』『淞濱瑣話』など、文学に属する筆記や小説の数も少なくない。これら文学作品のうち、『淞隱漫録』『淞濱瑣話』『漫游随録図記』は、いずれも 1880 年代に上海の新聞『申報』の副刊『点石齋画報』に付録として連載され、その後単行本として刊行されたもので、新聞雑誌という近代メディアへの、最も早い時期の連載小説、連載エッセイと言える。『淞隱漫録』は、『点石齋画報』1884 年 6 月 28 日発行第 6 号から 1887 年 9 月 22 日発行第 125 号までで連載が完結した。『淞濱瑣話』は『淞隱漫録』の続編として『淞隱続録』の名で第 126 号から、『漫游随録図記』は第 127 号から連載が開始されたが、いずれも完結しなかったようである。但しその連載終了時期・理由については不明な点が多い。

本報告は、『淞濱瑣話』『漫游随録図記』の連載、成立、刊行の過程を整理・考証した上で、『点石齋画報』に同時に連載されていたという事実を考慮しつつ、これら 2 作品に登場するヒロイン、または外国人女性の描かれ方を通して、王韜の女性観の特質を解明しようとするものである。『淞隱漫録』『淞濱瑣話』は、蒲松齡の怪異小説集『聊齋志異』に倣ったと作者自ら謳う文言筆記小説集で、『淞濱瑣話』には小説の他、明清時代に流行した「艶史」に属する筆記も多い。一方、『漫游随録図記』は 主にヨーロッパ滞在時の見聞を記し、欧州の女性に関する記述も多い。王韜には、中国伝統の文人たちの間に見られる「才妓」崇拝があるとともに、欧州において中国とは異なる女性の振る舞いを実見するという当時と

しては稀有な経験も有していた。本報告では、この両者が王韜の中で如何に結びついていたか、更にそこからどのような新たな女性像に発展したかを論じる。

E-3：劉珊珊（上智大学・院）：清末新政期の「毀学」風潮

清末の新政とは、20世紀初頭に始まった、明治維新をモデルとした中国社会・政治の近代的改革を総称するものである。新政は多岐にわたる改革を行ったが、教育制度改革・学堂建設がとりわけ重視された。しかし、当時の新聞や雑誌によると、「民衆による新式学校襲撃事件」、すなわち「毀学」が、「無地不有、無日不有」（いつでもどこでも起こる）と言われるほど、全国で頻繁に起こっていた。今日の我々からすれば、生活の智慧を身につけ、社会建設の経験を習得する貴重な体験の場であるはずの学校が多数の民衆の攻撃、暴力的破壊に遭ったという事実には、大きな関心を向けざるをえない。

清末の新式学校は必ずしも民衆から好感を持たれておらず、むしろ彼らの日常生活からかけ離れたものとして敬遠されていた。新式学校の設立・運営は、善良な官僚によって行われた場合でさえ、民衆の負担を重くし、彼らの生活を一層苦しめるものであったが、多くの場合、新式学校は学務関係者の営利に利用され、民衆の強い反発を招いていた。さらに各種税金の加徴や戸口調査、寺廟の転用、米価の高騰などさまざまな原因が重なり、民衆は毀学という過激な行動を起こした。これらの毀学暴動は、近代学校政策が本格的に導入された1904年以後に全国規模で頻発し、普遍的な社会風潮のようになっていった。

本報告は、当時の雑誌や新聞に掲載された毀学に関する記録を用いて、なぜ新政期に毀学が次々と湧き起ったか検討するとともに、それを転形期の学堂教育政策とその実施のうちに探る。

E-4：鈴木航（一橋大学・院）：戦地記者としての曹聚仁——中国ジャーナリストの近代性をめぐって——

日中戦争・第二次世界大戦を通じて、日本は官民あげてメディア統制を推進してきたが、このような日本と対峙する立場にあった中国側の戦争報道はいかなるものであったのだろうか。本報告は、日中戦争期に中国側の戦地記者（戦場特派員）として活動し、様々なジャーナリズム論を書き残した知識人、曹聚仁（1900-1972）をとりあげる。抗戦におけるジャーナリストといえば、「愛国的ジャーナリスト」とされた鄒韜奮が編集者・経営者として手腕を発揮したことが知られ、彼の抗戦にかかわる言説や思想について多くの研究がある。しかし戦争報道は現場の取材が不可欠であるにもかかわらず、従来の研究では取材記者が果たした役割はあまり注目されてこなかった。戦場の取材・報道を行う戦地記者の存在は、救国ナショナリズムの立場からメディアの国家的動員という側面がありつつも、記者たちが現実の取材経験をとおして新たなジャーナリズムの理想を培うようになっており、単に「動員」されるだけの存在でもなかった。曹聚仁はそうした中国の戦争報道を体現していた一人である。

戦争以前には大学教員・作家として大衆語運動を通じて魯迅とも関係があったが、抗戦開始後、その経験を踏まえて大手新聞社や中央通信社の特派員として各地方の戦場を歩き試行錯誤の中で記者経験を重ねた。戦前の政治化する北京メディアと商業化する上海メディアとの双方を批判、これら「京派」と「海派」ではない、現場取材を重視した新しい中国ジャーナリズム創出を唱えて独自の記者論を展開した。彼の思想と実践の関係から見えるのは、戦争の限界のなかで追及された中国の現実を踏まえた近代性への模索であった。